



発掘された大宰府の中世寺院

—太宰府市推定金光寺跡の発掘調査—

Kyushu Historical Museum Exhibition guide

はじめに

大宰府には、観世音寺をはじめ、国分寺、国分尼寺、般若寺、四王院など、多くの古代寺院がありました。ただ、それらの古代寺院の多くは、中世にいたるまでに廃寺となってしましますが、観世音寺は、中近世を通じ、現在に至るまで法灯を灯し続けています。

江戸時代前期に著された『筑前国続風土記』には、中世の観世音寺には、有名な戒壇院を初め、四十九の子院(本寺に属する僧侶などが居住した寺)があったとされ、それらの寺院名が載っているとともに、地名などからいくつかの子院については、場所が推定されています。そのうちのひとつ、金光寺と考えられる遺跡が発掘調査で見つかっています。

I 推定金光寺跡の発掘調査

観世音寺の北、四王寺山の南麓の座禅谷には、字「今光寺」の地名があります。その一角では、昭和28年(1953)に九州大学、さらに昭和53・55・56・62年には九州歴史資料館により発掘調査がなされ、中世寺院跡と思われる礎石建物、火葬墓群の他、陶磁器、漆器、木製品など、数多くの遺物が出土し、字名等から「金光寺跡」と推定されました。



推定金光寺跡位置図(網部は観世音寺子院推定地を示す)

※高倉洋彰2007「中世観世音寺の隆盛と衰退」『観世音寺-考察編-』(九州歴史資料館)から転載

ただ、建物配置や出土遺物の内容から、武家居館の可能性も指摘されているために、遺跡名称は「推定金光寺跡」としています(また、金光寺の一ヶ寺だけでは広すぎるため、金光寺の他、座禅寺などの他の子院も含まれるという説もあります)。

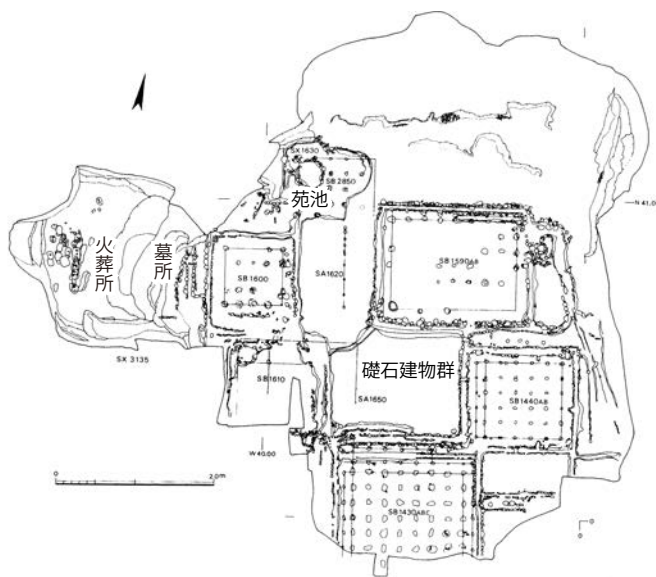
II 推定金光寺跡から見つかった遺構

(1) 礎石建物・苑池

調査では、礎石建物6棟が検出されました。それらはほぼ南北に軸をそろえて整然と建ち並び、周囲には雨落ち溝が廻らされ、それぞれに本堂や庫裏、仏堂などが想定され、さらに北西側には水を湛えた苑池遺構なども見つかりました。これらの建物は13世紀後半から16世紀前半にかけて、幾度かの変遷を繰り返して存続したことが分かっています。

(2) 火葬所・墓所

礎石建物群の西側背後では、石塔が立ち並ぶ墓所が見つかりました。この石塔群には石列による区画(墓域)が設けられて、列をつくって整然と造営され、五輪塔34基・板碑21基・宝篋印塔1基、そして宝塔1基を確認しました。調査時には上部は散乱していましたが、五輪塔は最下部の地輪が原位置



推定金光寺跡発掘調査平面図

留めた状態で残されていたので、石塔のおよその配置が復原できました。石塔の下には骨蔵器（骨壺）が埋められ、その内部には火葬骨が納められていました。骨蔵器となる陶磁器壺の口縁部は石塔地輪に接していたため、これらの石塔は供養塔ではなく、墓塔として造営されたと考えられます。また墓所のさらに西側には、遺体を火葬する火葬場（火葬坑）や土坑墓なども確認されました。

Ⅲ 推定金光寺跡から見つかった遺物

礎石建物跡周辺からは、鬼瓦や巴文軒丸瓦など、建物に関わるものの他、金銅製宝冠や土製地蔵像などの信仰に関わるもの、漆器、陶磁器や木簡など、生活に関わる遺物が出土しています。土製地蔵像は、豊前青龍窟（京都郡苅田町）や、豊後府内大友氏遺

跡（大分市）などにも出土例があります。陶磁器では、非常に希少な14世紀代のベトナム産の鉄絵白磁なども見つかっています。

一方、墓所からは骨蔵器に用いられた陶磁器が出土しており、中には韓国新安沈没船（1323年）出土品に類例が求められる完形の陶磁器も見つかっていて、これらの骨蔵器は、「推定金光寺跡出土品」として福岡県の有形文化財に指定されています。

おわりに

以上のように、推定金光寺跡の発掘調査では、遺構・遺物共に多くの発見があり、大宰府の中世寺院を知る上で非常に重要な情報をもたらしています。

（学芸調査室 岡寺 良）



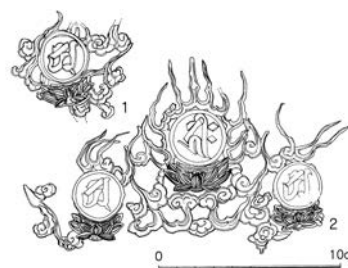
礎石建物群



墓所（石塔・火葬墓群）



火葬坑および土坑墓群



金銅製宝冠
（九州大学考古学研究室蔵）



陶磁器類



鬼瓦



土製地蔵像



編集 発行：平成29年5月30日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒 838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575 FAX 0942-75-7834
URL <http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/>